

「まちあるきに資するガイドブック・HP 作成プロジェクト」

鳥越けい子

はじめに：

本プロジェクトは、都市デザイン・まちづくりに役立つツールとしての「まちあるきに資するガイドブックならびに HP の作成」をその最終目的とするが、活動内容にはそのための「調査活動」ならびに「まちあるき」活動の計画・実施等の作業を含む。2020 年度は、昨年度までの活動を踏まえ 1)「善福寺池とその周辺地域」、2)「渋谷神泉円山町」という二つのフィールドにおいて、各種の活動を展開した。以下、それらのフィールドごとに今年度の活動内容を報告する。

1. 池の畔の遊歩音楽会 2020・トランスメディアウォーク

1-1. プロジェクトの概要

善福寺池とその周辺地域における「まちあるき活動」のひとつに＜池の畔の遊歩音楽会＞という形態がある。昨年度の報告書で解説したように、2010 年以来、筆者はこの遊歩音楽会を毎年 11 月に開催される「トロールの森」というアートとまちづくりフェスティバルのなかで継続開催してきた。コロナ禍に見舞われた 2020 年度、遊歩音楽会の継続実施が危ぶまれたが、逆にそのことが、これまでの活動をコンテンツとする独自のプロジェクトの開始へと繋ることとなった。

＜池の畔の遊歩音楽会＞は、2010 年の開始当初より「多くの参加者が演者と一緒に歩く」という形態をとるものだった。とりわけ「ハイアートから芸能への移行」をめざした 2017 年からは、参加者による「目隠し歩き」を導入したことで「不特定多数の人々が密に集まる活動」となっていた（図 1）。遊歩音楽会の基本が「通気性の高い屋外パフォーマンス」でありながら、その実施が危ぶまれたのはそのためだった。



図 1. ＜池の畔の遊歩音楽会＞（2017）での目隠し歩きの様子

これまでの＜池の畔の遊歩音楽会＞で参加者が体験してきた事柄を、コロナ禍という状況下でも実現させる方法（特定の日時に人を集めて実施するパフォーマンスを取りやめ、できるだけ人を集合させず、個々人の活動のなかで完結するもの）として実現すること、それが筆者等の課題だった。そして、トロールの森事務局メンバーをはじめ関係者と議論しつつ、コロナ禍のなかで継続し得る方策として、今年度の共同製作者の鷲野宏と共に構想・実施したのが＜池の畔の遊歩音楽会 2020:トランスメディアウォーク＞だった。

課題解決の方法として構想・実施したプログラムは、次のようなものだった。まず、これまでの「遊歩音楽会」を「かつてこの地で行われていた不思議な儀式」、新たなプログラムを「その不思議な儀式の跡地巡り」と位置付けた（図2）。次に、池の畔の遊歩者やその作品の鑑賞者たちが、池の周囲に設置した掲示物、さらにはそこに記したQRコードからテキストと音源へアクセスすることによって、自分たちの周囲に今ある「現実の環境」の只中で、それぞれの「場所の記憶と物語」を呼び出せるようにした。五感全体で体験している「今ここの環境」と共に、スマホ等によって呼び出された各種のデータを確認することによって、鑑賞者のなかに新たな感覚や意識が形成されることを期待したのである。



図2 池の周囲10カ所の「跡地」

このように、リアルとヴァーチャルの世界の枠組みを取り外し、これまでの遊歩音楽会において伝えようとしてきた内容全体を、参加者ができるだけ立体的に体感することをめざして、各種のデザイン作業を経て完成した(ハードとソフトによって構成される)そのインスタレーションを<池の畔の遊歩音楽会 2020:トランスメディアウォーク>と命名し、「トロールの森 2020」の「空間 展示部門」への参加作品として 2020 年 11 月 3 日から 11 月 23 日にかけて、善福寺公園上池の周囲で設置・展開した。

1-2. 掲示物と配置力所

本プログラムは QR コードを読み込んで、音源を聴きながら周囲の環境を感じ、その土地へ思いを馳せるまでをもってその一連の流れが完了する。しかし、公園を訪れる(高齢者から子どもまで多くの年齢層にわたる)地域住民の多くにとって「QR コードによって編集したデータを呼び出す」作業は、当初からハードルの高い行為であると思われた。そのため垂れ幕(掲示物)だけでも、インスタレーションとして成立するようにした。垂れ幕に、最も表現したかった言葉を大きく掲示したり、それぞれの地点でのパフォーマンスで使った歌詞等の言葉を配置し、そのテキストを読むことだけでも意味ある体験となるようにした。(図 3)



図 3. 二番力所巡礼地：
インスタレーションとしての掲示物

掲示物のデザインにあたっては「跡地巡り／跡地巡礼」といったコンセプトを踏まえ、アニミズムのような土着的信仰と関連した雰囲気醸し出すことを心がけた。そのため、掲示物は「垂れ幕」とし、この設置方法等を含めたデザインについては鷺野宏にその担当を依頼した。「掲示物の素材については、現実世界（今）への意識の強化に繋がるよう、ヴィヴィッドに風に揺れる素材を、また向こう側をあえて意識させ、場所への意識を強めるために、掲示物の背景を感じ取れる薄い素材を採用し、2本の掘立柱の間に表裏で地色を変えた薄い幕を垂らすものとした。地色を変えることで、時々太陽光の入射や風の具合により見た目に変化が生じる」というのは、自身のデザインの工夫やこだわりについての鷺野の言葉である。

さて、同じ池の畔でも、これまで各種パフォーマンスを行ってきた各地点における「土地や場所の力」は重要な意味をもつ。公園内を歩く遊歩者および作品鑑賞を目的に訪れた鑑賞者が、現実の世界と過去の世界を行き来するには、まずは、公園内の遊歩道沿いの、それらの場所と関係をもつ地点に、何らかの掲示物を設置する必要があった。そのため配置箇所については、かつて音楽会において行ってきた各種パフォーマンスに関係をもつ10か所とした。

そのうちの8カ所は池の周囲をめぐるための遊歩道沿いにあり、遊歩者の偶然の視界に入る位置に置いた。そのそれぞれの個所の掲示物の色味は、掲示物の内容を踏まえると共に、現地調査を踏まえた選択をおこなっている。例えば、「七番ヶ所：聖なる島への祀り」を示す垂れ幕を設置する地点では、地元で「元弁天」と呼ばれる島との関係を慎重に検討したうえで決定したもの（図4）である。



図4-a. 七番ヶ所の設置地点
(島との関係を検討して決定)



図4-b. 七番ヶ所の掲示物
(歩道より撮影)

1-3. ウェブページの作成

これら一連の活動のなかでも、QRコードによって呼び出す「過去の遊歩音楽会のデータ」作成作業（図5）の内容は、過去10回にわたって実施した「遊歩音楽会」の記録全体を見直し、異なる年の静止画と音源を適宜混合して構成するというものとなった。それは、鑑賞者が、過去の音源を聴きながら、目の前に広がる風景とスマートフォンに映し出される過去の風景（図6）をその現場で同時に体験することで、現実の世界のなかでヴァーチャルな過去の世界を覗き込むことを想定したものだった。



図5. 六ヶ所巡礼地の掲示物と
スマホで呼び出した1シーン



図6. 二ヶ所でデータを読み出す鑑賞者（左）

スマホ画面に呼び出された過去のパフォーマンスにイメージ（右）

トロールの森 2020 の会期中、鑑賞者が各自の都合に合わせて、池の周囲を歩きながら「10カ所の跡地」で呼び出す「過去のデータ」は、過去のパフォーマンスの音源と写真だけではなく、それぞれの場所の来歴等を説明するテキストも含むものとした結果、今年度の作業は「まちあるきに資するHP作成」にも繋がるものとなった。

<https://www.otonoba-soundscape.com/ikenohotori/>

2. 渋谷円山町周辺の三業地：その成立と展開を辿る

2-1. 活動の概要

渋谷円山町をフィールドとする活動もまた、コロナ禍の大きな影響を受けた。当初、報告者が所属する都市環境デザイン会議(JUDI)の協力を得て計画していた座談会やまちあるき等のプログラムは中止もしくは延期せざるをえなかった。代わりに円山町に残る料亭・三長を会場に、ごく限定したメンバー、高橋千善氏（料亭三長オーナー）、稲田信之氏（建築家）、高山佳代子氏と筆者による研究会を立ち上げ、そのテーマを「渋谷円山町の三業地：その成立と展開を辿る」と設定した。そして、当該のフィールドに関する書籍や地図等の資料収集に協力をいただいていた渋谷区政資料室の山田剛氏を講師とする研究会シリーズと、最後に3回の研究会で話し合った内容を現場で確認する「まとめのフィールドワーク」を、以下の要領で実施した：

- ・第1回研究会 2020年11月25日 18:30- 「三業地の成立から関東大震災まで」
- ・第2回研究会 2020年12月15日 18:30- 「関東大震災から第二次世界大戦まで」
- ・第3回研究会 2021年2月10日 18:30- 「戦後から現在」
- ・まとめのフィールドワークと振り返りの会 2021年3月24日 13:00-18:00

以下、研究会でも参考にした「円山町関連略年表」（松田法子著「花街：渋谷・円山町の裏を歩く」『渋谷の秘密』PARCO出版, 2019, p.53 掲載）の事項を軸に、上記の活動を通じて確認した「花街円山の成立・展開」に関する事項、あわせて料亭三長のルーツを軸に、研究会で確認した地図等の資料・フィールドワークの様子等を適宜引用・紹介し、今年度の研究活動の報告とする。

2-2. 三業地の成立から関東大震災まで

- 1876（明治9）年 この土地を鍋島家の土地を荒木寅太郎（鍋島家の執事）が受け継ぎ、
「荒木山」と呼ばれる
- 1885（明治18）年 渋谷駅開業／佐藤家が弘法湯の経営を開始？
- 1886（明治19）年 弘法湯前に「右神泉湯道」と記した石碑が建てられる
- 1887（明治20）年 この頃、弘法湯近くに義太夫流しをしていた遊芸師匠が芸妓置屋
「宝屋」を開業？
- 1891（明治24）年 宝屋・林家・東屋・千代本が4軒で二業組合設立
- 1898（明治31）年 料理屋と芸妓屋が分離して芸妓屋組合設立
- 1903（明治36）年 料理屋組合設立
- 1907（明治40）年 料理屋組合・芸妓組合が再統合して二業組合設立／見番設置

- 1912（大正元）年 荒木山西半分を諸戸清六の諸戸殖産合名会社（三重県桑名）が買収
- 1913（大正2）年 荒木山約1万5千坪が三業地に指定
- 1919（大正8）年 渋谷三業株式会社設立

この期間に高橋家では「豊沢亭」を建設・設立。道玄坂は現在の道頓堀のような芝居のまちとして成立していたとも考えられる。

2-3. 関東大震災から第二次世界大戦まで（渋谷劇場）

- 1923（大正12）年 関東大震災
- 1924（大正13）年 この頃中川伯爵邸跡地に百軒店ができ始める
- 1928（昭和3）年 「円山」の呼称公式化（渋谷町大字・小字区域名称変更）
南平台町と大和田町の一部4千坪が新たに二業地指定
- 1931（昭和6）年 玉代問題で組合分裂、新見番として「道玄坂三業」発足
- 1940（昭和15）年 渋谷三業地のピークとされる
- 1942（昭和17）年 企業合同令による組合一本化（昭和17-18頃？）
- 1945（昭和20）年 空襲により円山町も被災するが一部の店は焼け残る

高橋家では大正11年に「豊沢亭」に代わり「渋谷劇場」を建設・設立。主に映画館として運営していた。

2-4. 戦後から現在（料亭三長）

終戦後、一部焼け残った店が慰安所に指定され米兵が利用？

- 1951（昭和26）年 料亭「三長」竣工開業
- 1957（昭和32）年 売春防止法施行／以降料理屋から旅館・ホテルへの転業盛んに？
- 1964（昭和39）年 東京オリンピック

この頃の円山町中心部の建物はほぼ料理屋兼芸妓置屋、周辺に旅館が立地

- 1970（昭和45）年 住居表示実施により円山町の範囲が現在の町域に
- 1972（昭和47）年 廃業した料理屋の跡にトルコ風呂やホテルができる
- 1977（昭和52）年 弘法湯閉業
- 1989-（平成初頭） 三業組合解散
- 2000（平成12）年 渋谷三業組合解散

この地域に戦後、いち早く開業した料亭三長を引き継いだ高橋千善氏は、さまざまな経営上の工夫をしながらその建物の保全しつつ、花街円山の歴史と文化を伝える努力をしている。